



門 = 14
號 760
卷



十月より根を序りし月にて御座りしはあつた
あまのあやういふてふらんて花とあり
こゝろ又紅蓮の起りて四月を花とく。

粉團花 てまり 木のちり。紫八麻乃くく花ハあちま
似て叫ぶらまきり乃く。正月花を切く
しきく花ハあままて。花ひくく
まハまきく。れひひけく
芳花粉團花てまりあり。蓮生ハ成
ひくく牡丹と一ありあり。

雪柳 紫八柳のくくあり。花ハあちま

雪柳

のくあり。一窠より極多くありたり。其の根乃
す赤く花も赤くありたり。其の葉も赤くあり。其の
根二三尺より四五尺あり。其の根を分
ちて之し。其の一種なり。

茼蒿 トウモロコシ 倭俗名菊と云ふ。花菊と似たり。十月より
うへし。又正月もよくわらふ。其の根を食
ふ。其の根を考ふると毒あり。

馬蘭 ウマラン 一名蠶實本草の葉似薤而長厚。三月開紫
碧花。五月結子。作角子。如麻大而赤色。有稜根
可為刷叢生。一本二三十莖。苗高三四尺。或

ては花の葉のつるを食ふと毒あり。

白頭翁 ハクダクダ 花ハ鈴の如く。其の葉似て。其の根は肉厚く。
花乃赤く。其の莖も白毛あり。山野に生る。葉ハ
又似たり。假ふると毒あり。

櫻草 オウゴン 三月に花をひく。其の根は赤くあり。白くあり。
其の根を食ふと毒あり。其の葉も赤くあり。其の根を
紫ハ蔓菁と似て。小なり。其の根を食ふと毒あり。其の
根を食ふと毒あり。其の根を食ふと毒あり。其の根を
食ふと毒あり。其の根を食ふと毒あり。其の根を食ふと
毒あり。其の根を食ふと毒あり。其の根を食ふと毒あり。
草あり。其の根を食ふと毒あり。其の根を食ふと毒あり。

庭檜 三四月は花をひく。あま檜の類ありて実
りし。花ハ糸あり。ちろきあり。うすありきあり。
本ハ多し二三たよむ。しき檜又似てらしし
花をけくしそ。今た檜より根より叢生し根
をわくちそ。うすし。うすし。根ありをひく
くけりて土をひく。うすし。うすし。あま檜
根。四月よりち檜へし。二月よりうすし。うすし
すし。葉ハあま檜又ハ被岸檜に似たり。

紫荊花 去る處なるし。あま檜をひく。一葉
花よりありありひく。花ひく。時葉あり。花

史曰。この檜はあま檜。あま檜をひく。根より
又檜を生そ。長くうすし。うすし。うすし。又曰
其花毒あり。人を殺す。

蝦根 葉ハ初生のうすし。似たり。又葉は似て人
る。三月中のみ。土をひく。うすし。うすし。うすし。
葉よりふりし。むらあま檜のうすし。あり。
ひしげよりうすし。赤土をひく。魚乃ありひけ
根あり。うすし。本草乃藜蘆乃集解にこれ
とそ。似たり。うすし。うすし。うすし。

荒世伊登宇 三月より四月に花をひく。実

てせしむ。去初又始うみし。下品なり。或云胡蘆已
なりと此なり。

仙臺萩 花黄なり。去よりやらし。或曰首菴是し

草牡丹 花よりし。去秋よりわら極し。

朱囊花 色くはる紅白。此は子菜乃紅白紫

あり。子菜なるハ花よりし。三月のすあひく
すハ四月ひく。ひくハ実あり。千葉ハ子す

りし。海よりありやうりなる土地よりなり。

子地ハハ花よりし。去よりやらし。上よりやらし

りし。はくはくありしなり。ハハ月中旬より

かめてより地を耕す。秋適日か平くは萩を

ふりて耕し。地をこあらし。浸栽カウニユ或畦を

うへし。上よりあをけり。去よりし。月をあらふ

らく。あをりて。去よりし。地をこあらし。去

よりし。苗をけり。去よりし。萩より小使を

けり。園史曰。くく。去よりし。苗を

あく。不ラヒハ又ゆへし。本草云。九月布子。居家必

備云。九月九日又中秋日なり。花よりし。葉

又中あり。去よりし。萩より。去よりし。萩より

萩より。萩より。萩より。萩より。萩より。萩より

たうともの多しけやく葉をばるし。

四月

菖蒲花

葉を花を燕子花と似てらひし一類ありて
別後あり。そまのしつらあひてそありま。又白
くは葉をさしけあり。古歌よあやめとよあは
浮よあはる菖蒲とて浮半のあをうく物をり。け
あやめよあはる。花をさしけり燕子花よりか
水底乃中或濕地よあはる。圃めをよあはる
とて根をさしけり。花より。秋乃あはり
とてやりらる。あはらる。わららる。

みハ秋のまら。

錦帯花

やまのしつらあひて。花はあは
白く。花より。又ひそらる。城乃あはる
とてあり。別乃一類あり。

鉄線花

葉をさし。花をさし。花紋ありあり。ま
また。又風車とて鉄線よ似る物あり。四月
花より。花より。鉄線乃花ハま
風車ハまら。

石竹

古歌よ。頃和名あり。こまらる。

つら。○本草綱目を考ふるに石竹と瞿麥くわくまと一物也。
 時珍曰。田野生者甚大如錢紅蕊也人家栽者小
 而嬌媚有數色俗呼テ為洛陽花。万葉集よ云石竹
 自て一ことよあり一物なり。いよしゆある人ると
 のいまし一こといわれあやりあり。ふいやさは陽花
 といふ。やまとまて一この花紅してといふ
 といふくとまて一この世はばあらはしといふ。所
 自て一このあらはし。古今集乃といふ一この河のあ
 けの花あり。いふの葉といふは。秋のこ
 くの花ありける。○草花譜曰單諱者名石竹

子辯ハ者名洛陽花又云石竹。須毎年起根分種刈後
 ○篤信曰。本草云弘景ハ今市人皆小者を用とあ
 る也。葉ハ圓乃石竹のあらはし。といふ一この
 ちの根あり生するハ三四月におひく。ちの根三
 年より生るをいふも。新ハ花の年くまりて
 けし。花とまくふハ二三月乃はちりくといふも。地に
 けよちませてうまりくまりて一歳をけくハちあらはしと
 いふ。藪の上よまけてあらはし。只やらうなる熟玉と
 といふくて。ほろいち載るし。まらけをまけて一年に
 花おく。根まけを苗生しておりく。藪合ふといふも。六

月乃ナク申七八月よまけん。蘇たうすなをりしやまて。
 りれハ多平三四月子花ひくく。凡石竹ハ実ありて
 娘差乃いよこ枯るるともよみ刈るれをも根可き
 実差加きて根も又あわくハ折る。たよけやく刈へ
 し。刈て好苗せよとて有此此又刈るるとし。好苗
 此苗好るあり。毎年必根をりけて改くべし。成生
 たらきあり毎月ひげを。秋のうけつて花をえん。こ
 せしハどもあ小便をうりしき苗をうりてみよき
 やし。蘇をゆひてそやく接ぎまへし。遅々れを
 花記たぎ雜ざいあり。とまきつるもよし。○一程とん

たる竹あり。花をえりて花をしりぬる花ひ
 きあり。まきうくして。ふ子ねは接ぎまへし。はね
 のをうくして子多ある竹も。接ぎまへし。活す
 虎耳草 葉をうく毛打りし。蔓をうて小白花を命く。
 倭俗おろく園中の名よあるハ根のうき。花は
 よむまへし。ふげりやうし。園史曰けり。あつて
 あつてうきまへし。あつて。あつて。あつて。あつて
 折る

红花 八月雨後多熱ゆよふゆとまらるとり麻を接
 けのこし苗せうしてなる葉をえりて苗をうりて

くまふりし。四月に花あり。暖を好して土人
 し。五月に実をとり灯油とし車に油をよみし。農政
 全書曰。とめとけしを灰或能毒をいへば。濃
 毒よりうくす。又四月に花をよみし。○本草綱目
 曰。二月八月十二月に花結し。○花を摘みハ花を
 るまふりし。赤くするは花をよみし。

白丁花

いふまゝの諸あり。木のくさくさ二三花
 づゆみくさる。おまふりし。活布を枝
 とみじくせり。一ふりくさくさ。花をよみし。花
 てりし。西國西ていげんていし。

芍薬

げ巷詩經よゆきとん。上代より名ある花を
 時珍曰。十月生芽。至春乃長。凡三十餘種。有千葉
 單葉樓子之異。月令廣義曰。十二月芍薬とらふ
 し。古今醫統曰。まわらう。芍薬をよみし。根大
 かり。傍根すくまふもの。とをよみし。花をよみし。
 ○遵生八牋曰。芍薬をよみし。八月に根をよみし。
 土をよみし。竹刀をよみし。ほを根をよみし。芍薬をよみし。
 うくまふりし。そのちり人薬をよみし。芍薬をよみし。
 あり。三年に一花をよみし。○又曰。十一月二月に芍
 薬をよみし。加へてよみし。花のよみし。芍薬をよみし。

一説。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 へし。花より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 と根をわける。芍薬の力より取りて。芍薬乃久大抵紅
 紫白乃三ありて。今日本乃芍薬凡百餘種あり。牡丹を花王として。芍薬を花相とす。芍薬位牡丹より
 げり。○赤土田土より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 根より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花

一説。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 へし。花より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 と根をわける。芍薬の力より取りて。芍薬乃久大抵紅
 紫白乃三ありて。今日本乃芍薬凡百餘種あり。牡丹を花王として。芍薬を花相とす。芍薬位牡丹より
 げり。○赤土田土より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花
 根より取りて。芍薬を根より取りて。元氣を根より抽出す。花

鼓子花 旋花ともいふ。花白くして清香あり。その
 形より牽牛花に似たり。又白あり。六月の節の
 ほよむさく。蔓生してけあたる。繁花を。根ハ
 根氏なりとて煮て食ふ。

紫陽花 赤土と好む。異を別する。夏日ハあまをく
 るくへし。陰地ハいさく。ひく時白く
 て後まきし。夏至の後をゆく。夏はけり。八月
 わらうへし。又さうもつ。丈木集ハありま
 とよあるとあり。

柀ちりし 月令廣義曰十月ハ柀乃熟子を煮る。さし

乾し。春三月ハもて。水と人灰とひて移し
 柀子とゆふ。くすべし。苗長し次の年うし
 親重と四年より。てまを好む。名花譜曰。夏月の
 柀とゆり。むさびて細奴とせし。つやまきく
 やらし。○げ花六出あり。他花ハ五出なり。おのり
 花をむく。あまうり。葉ハハハ。あるを月
 べし。葉ハまらゆし。さるんし。史記貨殖傳ハ。柀子
 とゆふ。富貴が候とゆふ。さるり
 実ハよく熟し。露なりてぼろろし。○一種花小
 ちて千葉なるあり。赤とむく。少なり。水柀

柀子

四十四

とみりし三才圖繪よみたり。わねよもくを
 の香はあまきうけし。梅る乃中あまひハ西内
 梅をすへし。園史曰。千葉梔子ハさくさくす。只枝
 のうらみちをむねし。ゆけくよりあまきへ。根
 せしてきりてうめし。凡ばあハさくさくす。あま
 葉あまきくもへし。枝をかりて種よさくさくす。ハつらめて
 根とくくも。根をかりて種よさくさくす。あま
 陸地をりし。あまあんで種をくらん。とさくさくすし。
 実のさくハさくさく。花をさくさくす。さくさくもさくさく
 食もさく。あまひハはくさくす。

剪春羅

二月より。あまひハはくさくす。二月より。あまひハはくさくす。

ゆきゆき。種をとりし。樹下りけり。あまひハはくさくす。

あまきり。秋の秋也

萱草

二月より。あまひハはくさくす。あまひハはくさくす。

あまひハはくさくす。時珍曰。宜下濕地。其嫩苗

及花跗作。菹食詩。衛風伯兮篇曰。采芣苢之采。言

樹之背。朱子詩傳。言。あまひハはくさくす。

あまひハはくさくす。あまひハはくさくす。

新書云。後根。畦中。菹種。一年。自稠。春剪苗。食如拘

杞。秋夏不堪食。○遵生八牋曰。單瓣者可食。千

辨者食之殺入又曰春可食苗夏可食花○。又曰
乃地よりあり。を花のふりてよきと書に記せり
よし。此草よきとせり

夏菊 其草形四十粒あり。冬根より苗を生ずる

とあり。十月十一月
乃此わらうとす。つらやうとす。秋菊のよし。
又り。いりて根よりあり。あつとあり。八月
ともなくとす。菊○。虎秋菊あり。あつとあり。毎る辰
のり制あり。已のせよと出。この物をとす。くそは
薬なりし。菊と名なく。あつとあり。そのまへん。

玉○。夏あり秋あり。そのまへん。秋菊よきとあり。くそは
よし。あつとあり。そのまへん。あつとあり。くそは

石榴花 花よくつらやうとす。秋菊よきとあり。くそは

榴花 照眼明○。枝開時見実始成○。作○。葉千葉
あり。又また母とす。あつとあり。子葉も。八月
し。人のくわら○。ハ中とす。あつとあり。人の子と
あつとあり。物よりあり。今もあつとあり。あつとあり
とあり。よし。枝とす。あつとあり。根とあり。○農政
全書目三月は嫩枝とす。肥よとす。あつとあり。あ
をり。けとす。又曰根のわらにをせり。

實のゆゑにさうしてさげしむ花をさうしてさうして。ふか
 肥さるゝとこのひ葉をさうしてさうしてさうしてさうして
 よいよのさうしてさうしてさうしてさうして。○篤信曰
 根は石をさうしてさうしてさうしてさうして。○唐詩
 畫譜曰嫩枝のさうしてさうしてさうしてさうして。○月日
 中よさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして
 指のさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして
 すをさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして
 二すりしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして

蜀葵

花をさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして

ひさく。彙苑云大明成化甲午日本人即ちよさうして
 て蜀葵をさうしてさうして。○さうしてさうしてさうして
 即ちて曰花は木槿花お似糸と芙蓉葉一般五尺
 欄干遮不尽尚留一半與入看とけくさうして。○異國は
 色うさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして
 ゆゑにさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして
 多糸千糸乃のさうしてさうして。○さうしてさうしてさうして
 宿根も又自らさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうして
 のさうしてさうしてさうしてさうして。○さうしてさうしてさうして
 之し

錦葵けいぎ 又油葵とも名付く。葉平くして薄のし。
毛寸じしきささきさきりしきりし。冬葵ふゆぎ
ハ葉よりあり。そのあつひよさきなり。毛寸にて
そとよりし。毛寸ハ葉よりぬ。葉ハわらきと合と。
毛寸の一也

黄蜀葵きんしやくけい 二月に種まらむ。あつハ花子よりつし。
あつあつしきりて葉にさき。毛寸の毛寸し。毛寸
のりま拂の毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。
毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。

芍薬しやくやく 五月に種まらむ。あつハ花子よりつし。

鷹爪たかづめ 葉ハ柳葉より似て尖なり。葉毛寸し。毛寸し。毛寸し。
毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。

合歡あつあつ 博物志よ。げあつと庭より種まらむ。人のつし。毛寸し。
嵇康ハこつを合前あつあつよりし。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。
毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。毛寸し。

すゝりらたぐく。○時珍のいふ。道野生及宛
ハ子めく藕イモ夕し。白花者子かく藕イモ夕し。そけふ
白イモ夕めくし。又曰。藕イモを煮るに洗器をいひ置
實をつきてあつてあよ和して粥候よし。輕身
益氣令人強健。○常伝曰。白蓮と紅蓮を一両よ
うあつて白蓮ハ消る。あよあし。白蓮ハ初め
うあつてすくあし。ゆ消る。白蓮ハ初め
ハ小葉をうし。あふよあつてはよハ大葉をうしてあ
向よりよく出りたる。一葉を生しては。一葉を
と例イモよげとあし。あ射と。故に藕イモとらふ。六月初め

日と遊ていふ。花ハ外イモの何のほあり己の何う
つりてぬけけ。午のほよ漸今よ毎あわの
し。こたあありてあつては。あ蓮ハか
いひし。あしとていひし。あつては
記考らんし。○蓮蓮ハ午とらんし。あつては
世よ漸イモあし。あつてあし。そ文和蓮イモは編り。
故よ考らんし。あし。あつてあつては。あつては
やうんてあつては。あつてあつては。あつては
し。あつてはあつては。あつてはあつては。あつては
あつてはあつては。あつてはあつては。あつては

葉花... 根... 三月の... 小力... 肉を... 根... 又... 根... 小...

ら... 根... 初根... 年... 葉... 根... 葉... 根...

白ハナハナリ。豆トモヤカシ。つとて道
 根ヲキケトシケル。豆腐ノウチヨリ。増氣ある
 ハナハナ。産養出クヤカシ。花ハ根モヤカシ。道
 年ハ和氣トシテ産養トモヤカシ。凡葉ハ
 人ノ垢汁膿血六畜法獸ノ血肉トモヤカシ。産養ト
 け入シトモヤカシ。必イテトモヤカシ。蘭ノ人
 ノアツケモ好マシトモヤカシ。産養トモヤカシ。ハ
 婦人ノ産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。

百日紅 又は紫嫩花トシテ。六月ハ及ハ九月トモヤカシ。花ハ
 紅艶アリテお子トシ。産養百日トモヤカシ。虫ハヤカシ

くらみ。おまへし。園史曰カ指メシ。こやけをけをけ
 枝葉トモヤカシ。花ハ俗怕痒樹トシ。俗俗オトモ
 産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。
 ひらき産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。
 けまはらし。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。
 やりトモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。
 正月トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。
 陰をこのじ

鳳仙花

女子の血を染る事多し故西國ハハつま紅ト
 云。二月トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。産養トモヤカシ。

おしりしるるまどい入る。おまあり。おまあり。又
 その月多と。ひま小毒あり。飛よらつてなると。
 齒りんと。魚の肉のこも。ゆを煮たんに。子と般柱入
 きて。やうらうらする。魚の骨ののんごん。らうらうら。ふ
 けまると。脹^はたねと。る。あう。故よ。胃核といふ。や
 実をと。やうらして。す。ま。花ひ。く。ひ。根
 毛。根と。せ。け。と。う。ん。や。と。し。ら。と。ゆ。よ。う。し。毎
 お。う。る。年。こ。う。作。し。う。ん。し。や。う。う。あ。く。ま。り
 う。る。肥。あ。ま。う。う。し。煉。う。の。う。う。ま。地。ま。う。う。す。

風蘭 潛確類書 曰桂蘭一名ハ風葉也

けし。少。う。こ。よ。入。柳。と。ま。う。け。と。く。仙。家。と。稱。と。細。花
 微。青。あ。り。と。う。り。又。五。雜。組。道。生。ハ。脚。ま。り。
 山。中。ま。の。こ。う。う。よ。ま。ま。す。ぞ。と。う。り。て。授。欄。の。毛
 ふ。く。う。う。け。柳。下。亦。擔。下。ま。う。け。と。ま。く。ま。と。流
 へ。し。水。中。の。浮。り。て。ま。さ。う。く。ゆ。ま。う。し。亦。日。冷。茶。と
 り。け。と。ま。う。け。る。ま。程。あり。ま。た。ま。る。白。う。り。て。紫
 ま。ゆ。り。花。史。曰。あ。あ。り。て。日。ま。ま。い。あ。う。け。あ。ま。
 細。夕。あ。ま。ま。ま。ま。し。福。州。府。志。曰。風。葉。ハ。三。樹
 ま。ま。ま。ま。ま。根。ハ。あ。ま。う。つ。ん。根。を。す。ま。者。こ。れ。を
 忽。ま。ま。ま。ま。ま。し。

乃。を。多。八。百。合。の。花。を。世。よ。は。あ。ら。う。の。世。現。は。凡
 世。の。人。の。考。現。す。る。もの。ハ。物。に。は。も。好。果。也。と。其。枝
 も。多。く。出。る。物。也。つ。つ。へ。多。人。あ。り。し。も。其。花
 日。中。の。し。ゆ。り。る。と。平。く。あ。ら。う。と。て。ひ。く。し。は。花
 ら。な。れ。と。さ。ゆ。る。む。ゆ。う。の。し。ゆ。り。と。う。は。地。系
 しく。し。と。と。は。実。を。と。り。し。よ。は。ち。と。あ。り。あ。り
 ず。お。も。あ。り。く。と。せ。せ。も。ゆ。の。吹。ら。し。ん。と。は。花。道
 と。よ。よ。と。と。あ。り。く。し。凡。は。花。の。実。を。と。り。し。は。
 皆。是。よ。あ。り。し。又。林。中。に。あ。り。ゆ。り。と。し。ゆ。ゆ。系
 ひ。く。し。て。百。合。は。似。と。根。ハ。百。合。は。似。と。心。成。業。て

合。と。味。百。合。の。し。ゆ。り。が。う。の。書。み。く。あ。ら。う。と。あ。ら
 う。を。世。に。し。

凌。宵。花。も。つ。る。も。お。人。の。と。も。あ。を。あ。て。よ。う。の。あ。り。
 花。の。あ。ら。う。い。と。と。あ。ら。う。の。し。花。実
 亦。又。あ。り。又。秋。も。と。り。く。花。を。鼻。も。あ。ら。う。あ。く
 へ。し。と。も。脳。を。や。う。と。花。の。実。目。は。入。道。と。同。く。く
 ち。も。

剪。秋。羅。 暖。縁。の。仙。翁。寺。より。出。る。花。を。名。く。と。り。し。
 秋。を。く。かん。ひ。ゆ。り。ゆ。き。たり。ひ。あ。ら。も。又。を。平。年。あ
 し。世。人。考。も。毎。年。お。も。う。を。改。う。し。と。う。す。す。ハ

さうくと。諸作らして。花史曰。日影を好む。葉を好む。肥やうへ。ほろをそくして。名花譜云。鶴葉。みして平とんし。或曰。樹下にうえてより。小便をりくんとし。

秋海棠 六月中よりさきとめ。秋よりりて花を

そ花をり。む花をり。け花より人目あや。り。正保のはらしめし。月令廣義。道生八階。おは。ゆまみより。宿根より三四月のは苗を生を根。ハ草のしく少りてあるし。又みおましくし。年

をり。陰地を好む。水乃厚くけ。をり。をり。宿根より生する。ハ草とるり。うるに毎年おさる。一尺よりり。月令廣義曰。陰地を宜し。道生八階曰。ついで目とみ。濃きくして。二月よりり。赤花あり。立秋のあり。八月より。二月よりり。葉を。ばあ。あく。他のまを。く。

つよま... 花の中は
底をうらしてうらしづる... 寸圍より一寸

洋蓬草 ヨウボウソウ 花の中は... 根の... 六七月は... 一寸圍より一寸

慈姑花 ジコウカ 花の中は... 根秋
冬よりうけて... 根を...
肥田より... 根を...

鐵色箭 テツシキヤ 冬... 五月は... 六月を...
花は... 根を...

浮薔 ウキバシ 古... 花は... 根は...
... 根を...
三才圍... 根を...

飛廉 トビレン 花... 根... 花は...

玉簪花 タマズナ 二月は... 六月は... 根は...
... 根を...

○名花譜曰。玉簪花。日けと好まば。法地。のうらな
毛ひくく。さうらとさくひんし。

花譜卷之中終

